

論文の和文要旨

論文題目 平安前期における日本漢詩文学の研究

氏名 顧 姍姍

平安前期において漢詩文学は日本朝廷の公的な文芸として全盛期を迎え、嵯峨天皇と淳和天皇との勅旨により、矢継ぎ早に『凌雲集』（八一四年）、『文華秀麗集』（八一八年）、『経国集』（八二七年）という日本最初の勅撰詩集が編集された。九世紀後半には、菅原道真、島田忠臣などの詩人が登場し、日本漢詩の創作技術を円熟させた。この時代の日本漢詩について、その形成と展開の過程に関しては、六朝や唐の文学の模倣や受容があったことが多く論じられている一方、中国漢詩文学には見られないその独自の様相については未だ十分な検討がされていない。中でも、日本漢詩における新たな「かたち」や要素の出現を考えるにあたり、中国文学からは直接影響を受けずに、日本漢詩文学の基盤の上で独自に発生した可能性については、改めて綿密且つ実証的な論考を行う必要がある。本研究では、詩歌を構成するのに不可欠な要素である形式、音韻、内容という三つの視座から、平安前期の日本漢詩文学研究において手薄になっている課題を取り扱い、当時の日本漢詩文学の新たな一面に光を当てることを試みる。

序論では、平安前期の日本漢詩文学に関する先行研究を整理し、本研究の目的や研究方法、構成を説明する。

第一章「対句の形式に関する考察」では、従来日本漢詩の論考の対象とされなかった「流水対」・「隔句対」の課題を取扱い、その格式作法の展開の自立性を解明することを図る。

第一節「流水対からみる平安前期の漢詩文学の展開」では、平安前期の日本漢詩における流水対の史的な展開を浮彫りにし、平安前期の日本漢詩の展開の中から流水対が自己発生した可能性を検討し、日本漢詩の独立性に光を当てる。流水対は、形式的には典型的な対句と同様、対語と韻律の規則に従っている一方で、意味の上では、上下句が対照・対立関係にある典型的な対句と異なり、上下句が互いに繋がりが一体となっている対句表現である。その対句表現史における意義は、「通（伝統を正しく継承すること）」と「変（新たな変化を求めること）」が共存する表現形式の現れであることにある。流水対の運用は、勅撰三集の時代という早い時期に起こり、菅原道真と島田忠臣等の時代にはより多く見られる。無論、九世紀の日本漢詩文学が中国唐代のそれに大いに影響を受けたことから考えれば、日本における流水対の発生原因を中国漢詩に求めるのは、妥当な考察であると思われる。しかし、流水対を形成している要素、即ち近体詩の対句規則を厳守できる技術力の基盤と、心情表現や意思伝達をより自在に展開させようとする詩人の意欲という二点から考えると、日本漢詩の展開の中から流水対が自己発生した可能性についても検討する余地があるのである。

第二節「隔句対からみる平安前期の漢詩文学の展開」では、平安前期の日本漢詩における隔句対に関する実態を検討することにより、九世紀の日本漢詩人たちが中国書物を介して、如何に漢詩文の格式作法を受容し、自らの漢詩文学を形成していったのかを明らかにする。当時の大学寮の教科書である『詩経』・『文選』や、空海が中国の詩話を網羅し編纂した『文鏡秘府論』に隔句対の句法が窺えるにもかかわらず、九世紀前半の勅撰三集においては、隔句対は、駢儷文などに盛んに用いられているのに対し、漢詩では一度も使用されていなかった。この対句法は、菅原道真や島田忠臣などが活躍する九世紀後半に至り、はじめて古体詩の表現法として使われることになった。この原因として、白居易が隔句対を愛用していたこと、承和期以降『白氏文集』の流行などが挙げられ、白詩の日本漢詩に与えた影響力の強さを推し量ることができる。しかし、道真の隔句対の運用法と白居易のそれを比較してみると、共通点を有しながらも、相違点も顕著であることがわかる。これは、日本漢詩が日本の独自の漢詩文学環境の中で形成されていたことを物語っているのではないかと考えられる。

第二章「押韻法に関する考察—次韻詩を中心に—」では、次韻詩の発生、展開、またその日本外交上の場における使用などの諸問題を検討し、日本漢詩における次韻詩の展開の自立性に光を当てる。

勅撰三集に次韻詩をその唱和した原詩と共に六組確認できたのに対して、『懷風藻』においては日本で最も早期の次韻詩にあたると思われる詩作を二首見つけた。ただし、『懷風藻』の二首は文献的な問題がある。そのため、第一節「平安時代以前における次韻詩の発生」では、中国南北朝六朝における次韻詩の発生及びそのメカニズムを明らかにし、平安時代以前の次韻詩の発生について検討する。次韻詩が押韻法と「座」の意識を重視する文学背景のもとで発生したことを明白にした上で、『懷風藻』における脚韻の運用の状況を調査し、当時すでに押韻法の運用、「座」の意識を重要視した「聯句」、「分韻詩」、「依韻詩」の創作が盛んに行われたことを実証する。また、中国で初唐まで次韻詩の用例が極めて稀であることを同時に考慮すると、懷風藻における次韻詩は、中国の次韻詩の直接影響を受けずに、日本漢詩文学独自の環境から発生したものとして、私見を述べる。

第二節「平安前期における次韻詩の展開」では、九世紀前半から後半にかけての次韻詩の展開及びその展開の理由について探究する。勅撰三集と菅原道真の詩集を調査した結果、九世紀後半に次韻詩の数が急増し、より盛んに作られていることがわかる。こうした展開を中国における次韻詩の展開と関連付けて考えてみると、中国の次韻詩の流行を齎した白居易を中心とした中唐の文学集団が、菅原道真へ巨大な影響を与えていることは明らかである。しかし、中国の次韻詩が中唐前期の大暦年間（七六五—七八〇年）以前には数が少なく、また原詩と次韻詩が別々に収録されていたことから、その存在を察知するのは極めて困難であった。そのため、九世紀前半の延暦期・弘仁期に現れてきた次韻詩は、中国の次韻詩の影響を直接受けたものであるとは到底考えにくい。次韻詩は、基本的な押韻法に基づいた、脚韻の使用上の制限付きの創作形式であるため、日本において押韻法に対する

工夫を重ねた上でのチャレンジ的な産物ではないかと考える。そこで、延暦期・弘仁期の日本詩壇に「座」の意識、押韻法を重視する傾向があることを確認し、当時の詩壇には、中国の次韻詩の直接影響を受けずとも、次韻詩の確立の背景が十分に備えられていたことを明らかにする。

第三節「分韻詩から次韻詩へ—奈良・平安前期における日本の新羅、渤海使との漢詩交流を中心に—」では、日本官人が新羅使、渤海使と交流する場で用いた創作形式の変化、即ち分韻詩から次韻詩への展開を確認した上で、その展開の実態と当時の中国における漢詩文学潮流の変動との関連、また日本外交との関連を検討する。その展開の原因の一つはまず中国文学潮流の変化にある。つまり、当時中国が東アジア世界における文明の中心であったという背景に、奈良時代の日本官人が中国六朝、初唐の宮廷で流行した分韻詩を取り入れることを通じて、自国の文化の水準の高さや国際化を新羅使に示そうとしたのである。同じように、白居易・元稹を中心とした中唐文学集団による次韻詩の流行は、九世紀後半の菅原道真らが渤海使を接待する時に次韻詩を用いた直接の理由である。また、分韻詩から次韻詩へと展開していくもう一つの理由は、日本と新羅・渤海との政治的関係にある。これを検討するにあたり、まず分韻詩が政治的上下関係を強く意識した創作形式であること、次韻詩で交流した詩人が比較的平等な関係にあることを明らかにする。これらを、当時の華夷思想の下で生じてきた日本の新羅に対する属国観、また日本と渤海との比較的対等で友好的な関係をそれぞれ関連付けることで、分韻詩から次韻詩への展開に日本の政治的要因が関係していることを明らかにする。

附節では、渤海使関係詩注釈稿「大江朝綱「裴大使重押蹤字、見賜瓊章。不任諷味、敢以酬答」」を掲示し、平安前期の日本詩人の渤海使への次韻詩の具体的ありようを呈示する。

第三章「漢詩の主題内容に関する考察—詠史、歴史講書を中心に—」では、漢詩文学を平安前期の政治状況と関連付け、その政治的意義及びその九世紀前半から九世紀後半への史的な展開について探る。

第一節「平安前期の竟宴詠史詩の一考察」では、三史（史記・漢書・後漢書）講書竟宴の場における詠史詩の題材に着目し、その詠法や、詩人の官職、当時の政治と関連付け、「文章は経国の大業なり」という平安初頭の文学上のスローガンが日本詩壇において如何に展開してきたのかについて考察を行う。特に「粟子の変」（八一〇年）といった政治事件や、九世紀後半における宇多天皇の親政姿勢を考慮に入れ、儒教的な国家政治に根を下ろした「文章経国」の理念が嵯峨朝の詩壇においては頂点を極め、九世紀後半に至り、菅原道真らの詩作において改めて光彩を放つようになったという展開を明白にする。こうした平安前期の政治が日本漢詩の展開に大きな影響を与えていることは、日本漢詩の独自性が形成された大きな理由だと考える。

第二節「平安前期における日本紀講書—中国三史の講書との関わりから」では、講書の受講者、講書の場所、講書の修了を祝う竟宴の状況に着目し、竟宴詠史詩を誕生させた直接背景である中国三史の講書と、竟宴和歌を生まれさせた日本紀講書との特徴を対照する

ことにより、双方の講書の平安前期における展開の様相を明らかにし、特に元慶期に変貌を遂げた日本紀講書の意義について検討する。双方のさまざまな相違点から、中国的律令制を拠り所とする中国三史の講書は、律令制国家の政治の構築のためにオーソドックスな道を歩んできたが、前期摂関政治が進展するにつれ、日本紀の講書は、藤原氏を中心とした政治集団により強い関心が寄せられたことが了解される。こうした中国三史の講書と日本紀講書が九世紀においてそれぞれ表わした性格及びその史的な変動は、時代が漢文学隆盛時代から国風文化復帰の時代へと流れてゆく傾向を物語っているのであろう。

結論では、序章の問題提起を受け、平安前期の日本漢詩が、形成と展開の過程では中国漢詩文学、特に白居易を中心とした中唐文学から影響を受けている一方で、自国の漢詩文学をめぐる環境と政治背景においてその独自の様相と自立性を有しているとして、論を結ぶ。